非文字の資料と資料化

網　野　　暁
AMINO Satoru
（COE 研究員・PD）

はじめに

神奈川大学 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において調査・研究が進められる中，非文字資料として図像・身体技法・環境・景観・感性・民具等，多種多様且つ非常に多くの成果が蓄積されつつあり，それと同時に本プログラムはそれらを資料化し，整理・情報化したものを世界に向け発信する段階に移行しつつあると思われる．しかし，その資料の多様さゆえに，資料化・体系化は容易ではなく，そして明確な一つの道筋を求められるものでもない．いま非文字資料の資料化と記述したが，試みにインターネット検索サイトの google で，この「資料化」という語をしらべてみると，その検索結果数は約 1500 件であり，たとえば「情報化」で検索したときの 458,000 件とくらべると非常に少ない[(1)]．資料はそれ自体が資料なのであり，それを更に資料化するというのは同語反復であると言えなくもない．また歴史学の観点から文献史料（資料）を見たとき，それをさらに別の形に資料化してしまうことはあまり考えられないことである．とすれば，資料としての非文字を考えていくと，資料化という語の定義自体が重要な問題として浮上してくる．本 COE 拠点リーダー福田アジオ氏は講演において，「非文字資料というものの中にはいろいろなものが含まれるわけですが，それぞれの非文字資料は，文字資料ももちろんそうですが，当然資料としての存在形態が違う，あるいは資料化するプロセスが違うのです．文字資料は最初から資料化されている（中略）これはその通りなのです．それに対して，非文字資料というのはそれ自体が最初から資料化されているのではなくて，資料化するという研究者の働きが入ってきます．そこから始まって資料化の方法，あるいは資料批判，さらに資料の存在形態の違いによる資料操作の違いということから，個別の学問というか，科学というのが成立してくる」と語っている（福田 2004 : 60）．すなわち，非文字資料は資料として存在すると同時に――もしくは，客観的な資料として成立していないがゆえに――，後に論じるように更に資料化というプロセスを辿らなければならないのである．そして，その資料化という行為も，例えば図像資料の資料化と身体技法の資料化では，おのずとその過程が異なってくるのは当然といえよう．したがって，本プロジェクトから非文字が資料として発信される時には，体系化に至るまでにそれぞれの資料に即した道のりを辿ることになるのである．一口に資料化といっても，学術資料として用いるため，文字資料として情報発信するため，あるいはディジタル化して発信するための資料化ではそれぞれ技術的にも内容的にも異なってくるとも考えられる．本稿では資料化に対する幾つかの試論を，本 COE プログラムで携わった調査において得たことをもとに，体系化していくための一過程を示してみたい．そして，非文字をいかに資料としていくかを考察していくなかで，資料学との関りについても，若干ではあるが，考えてみたいと思う．

I　資料・資料化・資料学

本プログラムは，その母体の一部として日本常民文化研究所と神奈川大学歴史民俗資料学研究科を含んでいる．両者はいずれも，文字資料・非文字資料を共に扱う研究機関であるが，このプログラムにおいては，あえて文字資料を排して非文字資料を扱っている．その理由は福田アジオ氏が「文字資料についてはすでに膨大な研究蓄積が学内外にあり，世界的にも研究が進展している．それに対して，文字に表現されない人間

の様々な行為や思考を資料化する方法は必ずしも開発されてこなかった」（福田 2003：4）と述べていることからも明確に伺える．確かに，文献史料・文字資料の研究は進み，非文字資料の研究はまだ途上にあることはひをみるよりもあきらかである．しかし，このことは文字資料と非文字資料を同一次元で考えることのできないことに起因していると思われる．冒頭でも述べたように非文字資料は，文字資料とはことなり，それ自体が資料であると同時に，さらにそれを資料化しなければならない性質を有しているのである．このことを日本常民文化研究所の神奈川大学への招致および，神奈川大学歴史民俗資料学研究科発足の一端を担った網野善彦氏が，「資料学」というものをいかに考えていたかを見ることにより検討してみたい．さて網野氏は歴史民俗資料学研究科の必要性について，次のように語っている（網野 1996 a：10）．

> 近年，これまで文献に偏りがちだった歴史学の実状に対する反省を通じて，文献史学，考古学，民俗学，民具学をはじめ自然科学の諸分野までを含む，諸学の緊密な協力が，急速に進展しつつあるのは，そうした課題に対する真剣な学問的対応の現れといえよう．この動きを真に内実のあるものとして発展させるためには，まず，文献・民俗・民具・考古・絵画・建築等，日本列島における人間社会の歩みの中で残されてきた各分野の資料そのものについての綿密な学問的研究を深め，そのそれぞれの特質を明らかにし，資料批判の方法を確立することにより，諸学の協力の前提を確固たるものとする必要がある．諸学の総合のための基礎となるべき資料学こそ，この課題に応える学問であり，これは一件迂遠とも思われるが，実は最も根底的な学問の正道といわなければならない．

網野氏はあきらかに歴史学の立場から文字資料，すなわち文献のみによるアプローチに限界を感じ，非文字資料を扱う考古学や民俗・民具学をとりこむことによって総合的学問をめざした．そのこと自体時代の流れに合致していたと考えられる．しかしその根底には，歴史学すなわち文字資料を中心とした学問の実情に対する反省があったことは否定できないと思われる．氏は決して歴史学と民俗学との間に優劣など一切考えていなかったであろうが，しかしながら資料学を考えた際には，まず歴史学ありきであったのではないかと思われる．そのことは，本研究科の特色として，文献史学については，「各時代にわたり，文献史料の史料としての特質，その学問的な取り扱い方を総合的に研究，修得させる教育体形を持つ研究科は例を見ない」と述べ，それに続いて「民俗民具資料学系も同様であり，民俗学・民具学の基礎となる資料そのものについて，文化人類学の視角を含めて体系的に研究，修得させる研究科は他に例がないと思われる」としていることから伺えるのではなかろうか（網野 1996 a：16）．すなわち，歴史学においては，その反省からこの学問の必要性を深く感じ，要求していながらも，一方でなぜ民俗資料を扱うか，民具を資料とするか，更に言えば文献以外の資料すなわち非文字資料を学としてどのように成り立たせていくのかまでの明確なビジョンを――今となっては知る由もないことだが――網野氏自身は果たして持ちあわせていたのであろうか．氏は 1990 年代にかけて文書，考古，民俗，民具等の諸資料はもちろんのこと，書籍，系譜，伝承，文学作品，地名，絵図，絵画，建築，石造物，金工品，音声，音楽，芸能等々，きわめて様々な資料が，本格的に学問的研究の対象となりはじめたことをうけ，これらの資料を如何に一つの「学」にまとめあげるか，次のように述べている（網野 1996 a：21-22）．

> そしてさきの多様な性格の資料は，人間の生活のさまざまな時と場での営みの中で生れ，現在まで伝えられてきたものである以上，それがどのような時，場で，だれがいかなる意図，目的で，どんな手続，様式にそくして作成し，またそれが生活，社会のなかでいかなる機能，役割を果たしてきたかを明らかにすること，さらにそれがなぜ，いかなる経緯で現在まで伝来しているのか，その過程を綿密に辿ること，これらがすべての資料学に共通した課題であろう．

すなわち文字以外の資料からも，その形成の過程や経緯をたどり，社会や生活の歴史を見るための資料学であったといえよう．また、この時期に「史料学」という語をタイトルに含む著作を発表するなど[(2)]，氏の中ですら，学としての史料学・資料学は完全に分離しては

いなかったと考えられる．氏にとって資料（史料）学は諸学の連携を計るための鍵としての役割が大きかったのではないかと思われる[(3)]．またあらゆる分野において急速に破壊されつつある史料・資料を救出し，蒐集・保存することの緊急な社会的必要性から資料学を必要としていたことも動機として存在していたと思われる（網野 1996 b : 1）．民俗学と歴史学の連携を計ったこと，資料学を一つの学問として確立を目指した点において網野氏の果たした役割は大きいといって過言ではない．そして，早くから民俗，芸能，音声，地名，絵図など様々な資料を一つの学問として包含し資料学とし，実際に自らの学問の中に積極的に取込んでいったことなど，評価されるべき点は多々有ると思われる．ただし，厳密な意味での資料学という視点から，さらに言えば非文字資料，資料化されるべき非文字という観点から網野氏の目指した資料学を改めてとらえてみると，やはり歴史学者からの資料学であったと言わざるをえないのではなかろうか．

以上，資料化という問題をきっかけとして，簡単にではあるが非文字資料から見た歴史学，民俗学そして資料学について考えてみた．次に資料化について，おそらく容易には答えを見いだせない問題であると思われるが，その端緒を開くためにも幾つかの具体的な事例をもとに考察してみたい．

II　非文字資料としてのトンパ文字の資料化

2004 年 5 月 24〜28 日まで丸山宏・蘇素卿・筆者がおこなった中国雲南省麗江県における調査を通じて得たことをもとに，非文字を資料化する際の問題点を，少数民族納西族に伝わる東巴文字を例に若干ではあるが考えて見たい．調査は非常に短い日程ではあったが，その中で東巴文化研究院の習煜華氏のご案内により，東巴の文化及び納西語について種々学ぶことができた．東巴文字とは先行研究から明らかなように，中国雲南省の少数民族納西族の宗教的儀式を行う東巴なる聖職者が，その儀礼内容を伝承するために用いた象形文字である．習氏によれば「納西族の東巴教は東巴経・東巴・儀礼の三つの部分から構成されている．およそ千種に上った東巴経は象形文字で書かれており，遠古の神話・物語・宗教祭文などが記されて」いるのである（習 2002 : 73）．この東巴経に記される東巴文字が，文字資料なのか，あるいは非文字資料と呼びうるものなのか，言語学的に明確な判断を下すだけの力は筆者にはないが，以下のような指摘は可能である．図 1 を見るとわかるように，東巴文字には一つの意味・内容をあらわす複数の異体字が存在[(4)]し，経典の内容・文脈あるいは書く場所によって，それぞれが使い分けられている．そして必ずしもある意味に対応する複数の異体字全体に通ずる，最少公約数のような特徴があるわけではない．すなわち図 1 で，①と②，②と④，③と⑤など，二つの図像＝異体字をとってみると，共通点は各所にみられるが，①〜⑥まで孔雀を決定づける，

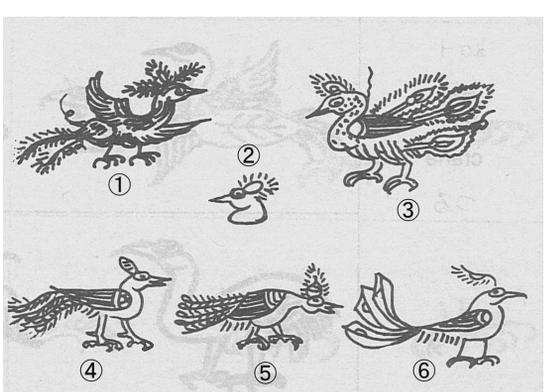

図 1　孔雀をあらわす東巴文字（習 2003）

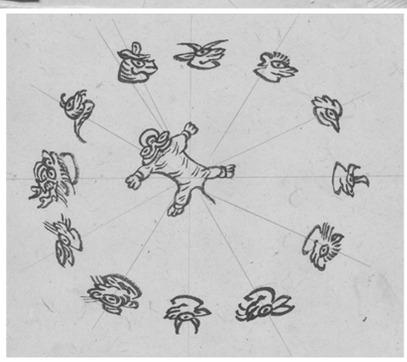
図 2　巴格図およびそれを描く和世光氏（筆者撮影）

特定のパーツなり特徴的な描写は見いだすことはできない．このことは他の文字にも共通していえることであり，一概に東巴文字＝象形文字，東巴文字で書かれた資料＝文字資料と断定することはできないと思われる．

さてここでは，筆者の問題関心の一つである動物という観点から，この東巴文字を考察し，東巴文字を資料として用いる，すなわち資料化するということはいかなることか，あるいはどのような可能性があるのか，素人の域を脱しないが考えてみたい[(5)]．

まず，東巴文字で表わされる動物が登場する代表的な図として，図２のような巴格図があげられる．これは婚姻の際の相性を見るときなどにも用いられる図だが（佐野 1996ｂ:313），これからも分かるように角や耳の形や模様等によって，それぞれの動物の特徴を描き表わしている．そしてこの図から明らかなのは，目の描き方が共通していることである．図３の犬・象・蛇・鷹からも明らかなように，ほ乳類全般および鳥類は，図３の目の拡大図で明らかなように目の輪郭の中に黒目が描かれる．鷹から鳩にいたる鳥全般，象からネズミまでの哺乳類全般，そして，獅子，飛ぶ蛇，竜，黄金の蛙等，想像上の動物，それ以外に蛇，コウモリ，蛙，おたまじゃくし等が一つのグループに分類されている[(6)]．対照的に，図４から分かるように昆虫・魚類は点で目の枠は描かれない．例外も一部あるが，ほとんどが，点だけか頭部のワクの中に点があるかだけである．自然科学の観点からすれば蚊から魚までは一つの範疇，そして，蛇から象までがもう一つの範疇であるとするのは，大雑把にすら思える．一方で東巴において宗教的な意味合いを持つ蛙などは，他の大型動物と同じ扱いであり，また，他の動物に比して絵のバリエーションが非常に豊富である[(7)]．また，図３にある動物

図３ （習 2003）

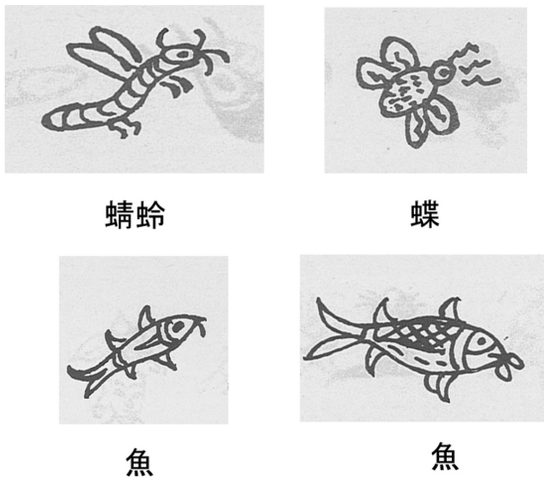

図４ （習 2003）

の皮から作った袋をあらわす場合，生命の無い動物をあらわすため黒目の無い状態で描かれており，納西族にとって黒目が生命を象徴していることを読み取ることができる．また，図５をみると，人および神はまゆ毛と共に描かれた目が特徴となっている．これに含まれるのが，自然神，東巴祭祀，占い師などである．また，見る・聞くなどという人間の行為をあらわすときには，顔に目・口・鼻などは描かれない．特定の一般とは明らかに異なる人格を描く時には眉毛と共に目を描き，動作一般をあらわす際に人間の姿を描かなければならない時は，目だけでなく何も描かれない顔になることがわかる．このように描かれた「目」を細かく見ていくことにより，納西族のもつ動物観を知ることができると思われる．

さて，ここで資料としての東巴文字を考えた時，様々な捉え方が可能となってくる．つまり文字資料として考えた場合には東巴経典は儀礼内容を書き記した文献資料であり，書かれている内容がそのまま資料である

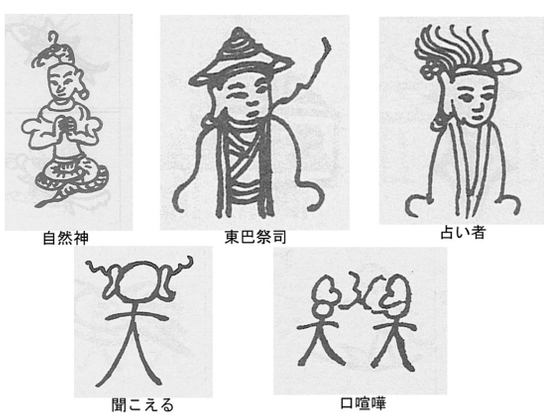

図５ （習 2003）

といえるであろう．しかしながら，一つの内容に複数の図像があることを考えれば，この経典を象形文字によって記された文章と解釈してしまってよいのであろうか．司祭者である東巴が図像を描き分けていることに，ある図像を使わずにこの図像を使ったということに意味を見いださず，例えば猿を表す図像であるから猿という文字が書かれているとだけ解釈してしまって良いのであろうか．それは漢文とひらがなで書かれた文章の違いと同じぐらい，いやそれ以上に違いがあるのではなかろうか．また東巴文字はその一字が象形文字としてそれ自体，資料になりうる．そして文字としてではなく図像としての特徴に重点を置いた時には，それは非文字の資料として様々な分析が可能な対象となり，今回行った動物という観点から分析した東巴文字もこれにあたる．孔雀という意味を表す文字内での考察と，異なる範疇間での図像の比較・検討が可能になったのである．とすると東巴文字の資料化とはどのような形になるのがふさわしいのであろうか．明確な解答を得ることのできる段階ではないが，その「化」のありかたは一つではなく複数であることは間違いないと思われる．そして，この点が文字と非文字との間の存在と考えられる東巴文字を非文字資料としてあつかっていく際の難しさであると考えられる．

III　福島県只見町

次に 2004 年 6 月 17 日〜19 日佐野賢治・大里浩秋・田上繁・中村政則・能登正人・的場昭弘・網野暁で行った福島県南会津郡只見町の現地調査をふまえ，資料・資料化という観点から，只見町の民具およびそれらを実測した民具カードについて考察してみたいと思う．佐野賢治氏が述べるように只見町には厖大な数の民具が残されると同時に，現地のしかも実際に使用し，あるいは製作していた人によって民具のカード化を行われているために，情報発信するという面において非常に好都合なのである（佐野 2004：160）．すなわち，民具という非文字資料が，すでにカードとなり文字・図像などで，表わされ資料化されているために情報の発信に適しているのである．ただし，只見式とまで呼ばれる民具整理方法でカード化された資料は，さらにもう一段階の資料化が可能であるといえよう．資料で

図 6　2004 年 6 月只見町民具収蔵庫における調査（筆者撮影）

ある民具を実際に使用した人によって記録されたことにより，そのカードは客観的に実測された記録とも言えると同時に，使用者による主観的な情報をも含んでいるのである．したがって研究者が作成したカードとはその持つ意味が大きく異なることは，あらためて言うまでもない．佐々木長生氏が述べるように，生産者・使用者が記録することは，すなわち民俗誌・民具誌なのである．佐々木氏が「只見町の民具整理の一番の意義は，製作・使用経験のある人たちによる整理作業である．そのなかには，収集された民具の寄贈者すなわち制作者・使用者もおられる」ことを指摘され，このことを「民具の整理としては最高の条件」であると述べているところに非文字資料を考えるうえでの重要な点が示されていると思われる（佐々木 1993：2）．只見式と呼ばれる整理方法は，単に非文字である民具を資料化しているだけではなく，その成果であるカードが只見の民俗を語る資料であり，更なる資料化も可能となりうる資料化方法なのであるといえよう．

それだけではなく，只見町には三種類の民具カードが保存されている．まず，その一つは只見の使用者に

国指定・重要有形民俗文化財
（会津只見の生活用具と技術コレクション）

民俗資料調査カード

通番号 3081　分類番号 1[illegible]1-8

資料名	（地方名）シゴトギ　（標準名）
寄贈・借用年月日	昭和・平成 11 年 2 月 9 日
寄贈者	（住所）只見町大字 字荒屋敷 番地
所有者	（氏名）目黒大蔵
材質	木綿
使用年代	明・大・昭　年頃から　明・大・昭　年頃まで・現在も使用中
使用目的	仕事着　作業衣
収蔵場所	旧朝日公民館
備考	もんぺ上下
調査年月日	平成 11 年 6 月 16 日
調査員	横山哲夫

写真・形状・寸法等

只見町教育委員会

図 7　只見町民具カード

より，最初に実測された民具カード，そして，民具を国指定とするさいに改めてとりなおされたカード，国指定のためのカード作成するさいに，予備的にとられたカードの三つである．この三種類のカードがすべてそろってこそ，本当の意味での只見式民具カードと言えるのだと思う．

このように非常に価値の高い民具実測記録であると同時に，民俗誌としての資料的性格まで有するこの只見町の民具カードを，いかに資料化し，それが情報として発信されるような形にまで昇華させるかが，我々に与えられた課題であると思われる．

それでは，いかなる方法が想定され得るであろうか．まず，単純に只見のカードをデータベース化しウェブ等で公開しただけでは，非文字資料を資料化し体系化した成果の情報発信とはならないと思われる．例えば，先に記した只見町の三種類カードを重ね合わせ，さらにその上に，同じ民具を全くの第三者が客観的に実測したものを，重ね合せてみてはどうであろうか．只見式による三種類のカードを重ねることにより，只見における民具実測の経緯をたどることができ，それに加え，別の視点から計測された結果を重ねて透かして見ることにより，只見式民具実測が，他と異なっている部分を視覚的に提示することができるのではなかろうか．客観的なデータは決して一つに限られることなく，いろいろな方式や視点から複数重ねられても面白いと思われる．不必要と思われればそれは覆い隠してしまえばいいだけのことである．写真部分に関してもこの只見式でとられたカードの写真の裏側に国立民俗博物館で行われているような三次元実測によるデータをおくことも可能であろう．このように情報発信される際には，それはレイヤー状に[8]多層になることが望ましいと考えられる．すなわち，例えば第一層は現地の人によって書かれた只見式のカードそのもの，第二層にはその文字データがディジタル化され，検索可能な状態になっている層，第三層には，外国語に翻訳された層，そして第四層は，只見とは関係のない第三者がどの調査地においても行っている客観的に実測したデータ，第五層は様々な方法で撮影された画像資料，第六層は……といったようなモデルが考えられる．使用するソフトやどのようなレイアウトにするかなど検討の余地は多く残されているが，ただし，これはいわゆるリンク形式の情報の重なりあいではなく，ある情報の向こう側に様々な情報が透けて見ることのできる，不必要なものは隠され，必要なものが浮き出てみえるようなレイヤー状の形がふさわしいと思われる．リンク型は世界中のあらゆる関連する情報への窓口になりうるが，ここで求められているのは，必然的に多様にならざるをえない，非文字の資料化をどのように形として表すかである．すなわち，非文字資料一つに対し，あらゆる角度から資料化された結果が一つの塊として元の資料に対応していることが求められるはずであり，それがリンク型ではなくレイヤー状になった資料なのである．

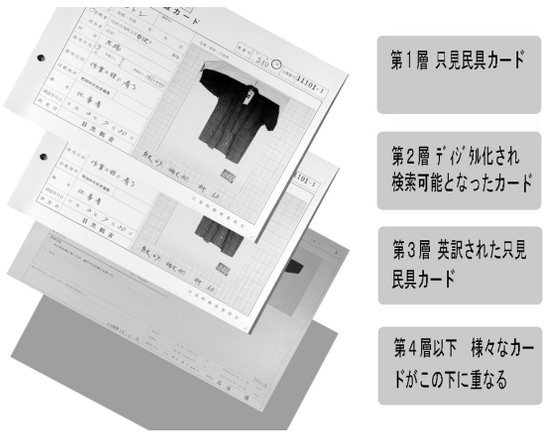

図8　レイヤー型民具カード概念図

そして，より理想的なのはその資料化された全てが一つの集合体として提示されつつも，のちに新たな資料化がはかられた場合，容易にそれを取込めるような形である．たとえば，民具が絵引きのように言語的に分解され，素材・パーツ・構造など細かく名称づけられたりした時，先程のレイヤー上にさらにそれが一層加わり，全く関係のない材質や部分の名称から検索をした人が，想像もしていなかった只見の民具に辿りつけたとしたら，それは資料化および体系化の一つの形であると思われる．素人の底の浅い思いつきかもしれないが，これも非文字資料を情報として外部に提示する際の一つのあり方ではなかろうか．

おわりに

歴史民俗資料学研究科開設十周年記念シンポジウム『歴史と民俗の交錯――記録すること・記憶すること』のなかで，川田順造氏・中村政則氏・福田アジオ氏の

講演後の質疑応答の中で，小馬徹氏が歴史家は史料（資料）を探し出して来るが，過去の史料（資料）については自ら書くことをせず掘り起こそうとはしない．一方人類学者は普通なら決して言説化されることのない普通の人々の過去，あるいは現在というものについての資料（史料）を自ら書く立場にあると語っている．これはあくまで歴史認識のなかでの資料（史料）に関する発言であるが，このことは同時に文字と非文字の間にある資料化の問題にそのままつながり，また網野善彦氏が資料学（史料学）を非文字の観点を含んだ形でとらえられなかったことにも通じるのではないかと感じた．そしてそう考える中，漠然ながら資料化とは，データ化やコード化あるいはテクスト化あるいは他の様々な「……化」の複合ではなかろうかと考えるに至った．データ（data）を広辞苑でひくと，「立論・計算の基礎となる既知の或いは認容された事実・数値．資料」とあり，同じくコード（code）の項目には「情報を表現する記号・符号の体系．また，情報伝達の効率・信頼性・守秘性を向上させるために変換された情報の表現，また変換の規則」とある．東巴文字・只見の民具資料にしても，その資料化を考える際には，単にテクスト化，単なるデータ化では不十分であると思われる．また「化」を変換ととらえるか，別の形で表すことなのかなども資料化の一つの重要な点だと考えられる．このように資料としての非文字そしてその資料化の問題は未開拓な分野であり，ここで解答を求めることは無理であるが，このプログラムが進むにつれ様々な資料化のあり方が導き出されていくと思われる．

付 記

なお本稿作成の為の調査において，中国雲南省でお世話になった習煜華氏，南会津郡只見町での佐々木長生氏，横山哲夫氏，渡部幸生氏，馬場惇氏，新国勇氏他，町の多くのお世話になった方々に，記して御礼申し上げたい．

注

(1) このようなインターネットの検索サイトによる考察が，ほとんど学術的な意味，あるいは客観的な意味を持たないことは筆者も認識している．インターネットから導き出された数は，あくまでインターネットを利用する範囲の中での数字である．従ってここで得ることのできた数字が，そのまま「資料化」「情報化」の正確な使用頻度を表わしていないことは十分承知している．しかし，この圧倒的な差は，無視するには大きすぎると思われる．そもそも，言葉の使用頻度を求めるということ自体，これまで簡単に行えるものではなかった．手軽さゆえの安易な使用は控えなければならないが，しかし，これらの検索機能を用いて行く方法についても，後日を期したいと思う．なお，他の検索サイトにおいてもほぼ同程度の格差を見ることができ，また，検索方法はフレーズ検索によった．

(2) 網野（1996ｂ）では史料学・資料学と並列的に考えているが，タイトルにあえて「史料学」を選択して使っていることからも明らかなように，「歴史史料」からみた資料学を明らかにしようとしていると思われる．

(3) この史料と資料の違いについては様々な論議があるが，本研究科に即して考えるならば，中村政則氏の見解が明確である（中村 2004 : 27–30）．

(4) 習（2003）において，これらを氏が日本語に訳す時に異体字としたから，あえて異体字と考えて見たが，更なる検討が必要であり，後日を期したい．

(5) 本考察とは直接関係はないが，納西族の動物に対する認識の一例は安室（1995，1996）が参考になる．

(6) ただし，蛙も巴格図など信仰の対象として描かれる場合は他の大型動物と同じような目で表わされるが，一方で魚や虫と同様に黒い点のみで表現されている図像もあるので一概にはいえないかもしれない．ただ，単なる小動物としての蛙と，信仰の対象というイメージでの中での蛙とが全く異なるものとして納西族の観念にあるとも考えられる．

(7) 蛇，蛙，おたまじゃくしのシンボリックな意味については習（2002）に詳しい．

(8) layer．レイヤとも．層を意味する単語．グラフィックスソフトで扱われる描画用の透明なシートを指す用語．透明なシートに背景や人物を書いて重ね合わせる，アニメーションのセル画を想いうかべると分かりやすい．

参考文献

安達文夫・新谷幹夫
2004「画像技術と歴史民俗学研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』117.

網野暁
2004「非文字資料研究についての一考察」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』1.

網野善彦
1996 a「資料学をめぐる若干の問題」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科『歴史民俗資料学研究』1.
1996 b『日本中世史料学の課題』弘文堂.

朝岡康二

1999「民俗学的な資料としての「モノ」とその記憶」国立歴史民俗博物館編『歴博大学院セミナー　民俗学の資料論』吉川弘文館.

福田アジオ

2003「「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の構想」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『非文字資料研究』1.

2004「【討論】歴史と民俗の交錯――記録すること・記憶すること――」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科『歴史民俗資料学研究』9.

石井進

1999「歴史研究と考古学」国立歴史民俗博物館編『歴博大学院セミナー　考古資料と歴史学』吉川弘文館.

中村政則

2004「歴史学という学問」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科『歴史民俗資料学研究』 9.

佐原真

1999「文献史料と考古資料」国立歴史民俗博物館編『歴博大学院セミナー　考古資料と歴史学』吉川弘文館.

佐野賢治

1999 a「あの世への道――納西族の祭風儀礼と神格図――」佐野賢治編『西南中国　納西族・彝族の民俗文化――民俗宗教の比較研究――』勉誠出版.

1999 b「ナシ（納西）族文化の象徴・東巴文字」『アジア遊学』63.

2004「“非文字資料”と地域社会――福島県只見町の民具保存活用運動――」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化』1.

佐野賢治編

1999『西南中国　納西族・彝族の民俗文化――民俗宗教の比較研究――』勉誠出版.

佐々木長生

1992「『図説　会津只見の民具』の編集を終えて」福島県只見町『只見町資料集　第 1 集　図説　会津只見の民具』.

1993「古老たちの民具整理――福島県南会津郡只見町の事例――」『民具研究』102.

2001「只見町の民具と保存活用」只見町教育委員会『只見町の民具保存活用運動』.

習煜華

2002「東巴教「祭署」儀礼における生殖崇拝」筑波大学比較民俗研究会『比較民俗研究』18.

2003『東巴象形文字異体字形集成』雲南美術出版社.

只見町史編さん委員会

1992『只見町史資料集　第 1 集　図説　会津只見の民具』福島県只見町.

山口徹

2002「「歴史民俗学」を考える――研究科設置の経過を振り返って――」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科『歴史民俗資料学研究』7.

安室知

1995「納西族のヒツジ管理にみる家畜の命名と固体識別――予察――」筑波大学比較民俗研究会『比較民俗研究』11.

1996「納西族の家畜および環境認識」筑波大学比較民俗研究会『比較民俗研究』13.

〔2004 年 10 月 15 日受理，11 月 10 日審査終了〕